
黄昏を生む器は何を奏でる

皆麻 兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黄昏を生む器は何を奏でる

【Nコード】

N7286U

【作者名】

皆麻 兎

【あらすじ】

主人公の猪俣 神奈は、バンドグループ「ABYSS」の新人マネージャー。忙しい毎日を送る彼女がABYSSのマネージャーをするのには、深い理由があった。それは、失踪した父を探す事——その目的を果たすため、バンドのボーカルである八尾龍戒流やおりゅうかいりゅうを含む5人の悪魔との契約を交わす神奈。仕事の傍らで、いろんな手がかりを元にする彼らは、最近流用の多いとされるドラッグ”Land”という物と巡り合う事となる。服用した生き物は、己の前世にあった記憶などが蘇るといふ”Land”の存在により、神

奈たちは翻弄されていくのである。

音楽を愛する人間の少女と悪魔たちが繰り広げる現代ファンタジー
となっています。

登場人物紹介？（前書き）

プロローグへ入る前に、登場人物の紹介をさせて戴きます。
ただ、今掲載されているのは連載開始前に考えていた設定のため、
今後少しずつ変わって（更新されて）いくとおもいます。

登場人物紹介？

主要登場人物

■ 主人公

猪俣 神奈^{いのまたかな}（20）

バンドグループ「ABYSS」^{アビス}の新人マネージャー。戒流と出逢うまでは普通の女子大生だったため、仕事を覚えるのに苦労している。趣味は楽器演奏で、得意な楽器はピアノとサックス。経済的な理由などがあつて音大には進まなかったが、小学校から続けている音楽をこよなく愛する。

明るくて活発。また、素直な一面を持つ一方で、「目的のためなら手段を選ばない」という強い信念も併せ持つ。“LaNDe”を発明した猪俣博士の娘。

八尾龍 戒流（23）

「ABYSS」のボーカル。黒と紫の入り混じった髪と赤い瞳を持ち、ヘビーな声でファンを魅了する、天才肌の歌手。その正体は悪魔で、仲間たちと共に、神奈の父・猪俣博士を探すために地上へ降り立つ。とても負けず嫌いな性格。

高麗 彰（23）

ギタリスト。戒流と同じ、悪魔の青年。顔は日本人のようなアジア系の顔だが金髪碧眼のため、公式プロフィールでは混血児^{ハーフ}という事になっている。冷静沈着だが、ギターの腕はぴかー。たばこの値段が上がっていても吸い続けるという、かなりのヘビースモーカー。

峯古井 能^{みねふるいあたる}（20）

ベーシスト。明朗快活な青年。神奈と同一年ではあるが、これは見た目の年齢。悪魔である彼の本来の年齢は、彼女よりだいぶ上。

篠崎 貴一（25）

ドラマー。生まれつき日光に弱いいため、UV対策の伊達メガネをしている事が多い。ABYSSのメンバーの中で最年長ではあるが、

お酒に弱く、酔うとかなりの幼児化をする。

古尺 夜次郎（こしゃくやじろう）（22）

キーボード担当。寡黙な青年で、何事にも客観視する事が多い。どこにいても眠れるという特技（？）を持つ。

登場人物紹介？（後書き）

ちなみに、A B Y S Sの5名と主人公・神奈の名字は管楽器の無簧管楽器に分類される横笛と古代尺八（こだい しゃくはち）の名前を変形させて使用しています！

プロローグ（前書き）

この作品はフィクションです。

プロローグ

ゴオオオオオツ

私の身の回りを埋め尽くす、たくさんの炎。その炎が、周りにある家具などを燃え去ってしまふ。このままずっといれば焼け死んでしまふだろう。そのため、早々に避難しなくてはいけない。

しかし、“それ”を私はできなかった。なぜならば、私は手錠をはめられてテーブルの柱にくくりつけられていたからである。

「誰か…誰か、助けてえっ！！！」

腕を拘束された私は、ただひたすらに叫ぶ。

何故、こんな状況になっていたのかなど考える余裕もない。ありつたけの声で叫ぶが、炎の音で声はかき消され、外には聞こえていないようだった。

「一体…何がどうなっているの…！！？」

燃え盛る炎は、ついに拘束されている私がいるリビングにまで伸びる。

父と一緒に撮った写真や、高校時代の友達と撮った写真等…思い出を飾った写真たてが次々に炎に飲まれていく。自分が過ごしてきた日々を全て消し去られてしまふような勢いで――

そして、炎に焼かれて死ぬかもしれないという恐怖に対し、私は今にも発狂しそうであった。

「…苦しいか？」

「…！！？」

今にも理性のねじが外れ、発狂に追い込まれそうな時であった。

とても低く、ハスキーな声がリビングに響く。「どれだけ大きな声を出しているのか」――そう考える余裕すらない私。しかし、奇妙なのは炎の燃え盛る音がとても大きく聴こえるのに、それを遮るかのようにしてその男性ひとの声が響くのであった。

「誰…？」

その後、革靴で地面を踏む音を立てながら、“彼”は現れる。

私の目の前には、黒と紫の入り混じった髪を持ち、異様な雰囲気をもった男性だった。どこかで見たことありそうな顔かと思いきや、誰なのかを思い出せなかった。そして、どういわけか彼の肉体に炎が乗りうつる気配がない。

「…お前が発する、生への執念。それが、俺を呼び寄せた…」

何が言いたいのか…？

私は、ただ彼の口にする台詞に耳を傾ける事しかできなかった。

近づいてくる男。私を見下ろすその瞳は、血のように真っ赤である。その男は手錠で拘束された私と、周囲の炎を見渡してから口を開く。「原因がどうであろうと、このままでは死ぬ運命…。だが、俺にかればお前の命を拾う事など、訳ない。さて…どうする？」

「私は…」

彼が発する声は、ただならぬ悪意を感じる。

今にしてみれば、“これ”は本当の意味で“悪魔の囁き”だ。しかし、死の恐怖に怯え、この状態に至るまで何が起こったかを私は思い返す。

そうだ…。私は、何も知らない。何も知らなかったんだ…。それならば…！

自分に襲い掛かろうとする炎を見据えながら、私は心に決める。自分の目の前にいる人が何者であろうとも、自分の目的を果たすためには手段を選ばない事を。

「貴方が何者だか知らないけど…」

「けど…？」

私の台詞を聴くこの男は、私を試すような表情で突っ立っている。

「私は、何が何でも生きて、やり遂げなければならない目的がある。そのためには…どんな手段であろうと、私は利用する！！それが、悪魔に魂を売り渡す事になろうとも…！！」

「…承知した」

私は真つ直ぐな瞳で、目の前にいる紅い瞳の男を睨む。

また、この時に私は無意識の内に“悪魔”と口にしていた。実際、この男性は本当に悪魔であるが、何故一見しただけでそんな区別ができたのか――この時は全く理解できなかったのである。

こうして私は、この得体のしれぬ悪魔の手によつて火事から助け出される。どうして自分は、死ぬ運命を与えられたのか――

――また、それ以外にもいろいろと“あの人”に訊きたいと思い、死の運命に抗う決意をしたのであった。

当時19歳だった私。そして、この1年後に運命の歯車が動き出す

プロローグ（後書き）

初めての方もいると思います。

作者の皆麻です。

この度は「黄昏を生む器は何を奏でる」をご覧いただき、ありがとうございます。

久々のファンタジー作品になりますが、舞台は私たちが生活する現代。

ライトノベルのジャンルとしては、ローファンタジーといったかんじです。

現代物は前から書きたくてネタはこれ以外にもあったのですが…そっちの方は考えた時がかなり昔だったので、こっち（以後は”黄昏奏”と省略させて戴きます）にしました。

また、登場人物を歌手にしたのは、韓流ドラマ「美男イケメンですね」の影響が少なからずありそう。笑

今回、プロローグでは主人公の神奈視点で描きましたが、今後は他の登場人物視点でも物語が進むように書く事となっています。ただし、あまりたくさん視点だとゴチャゴチャになりやすいため、主人公と今回出てきた「紅い瞳を持つ男」くらいにしとこうかなとも考えています。

では、更新頻度がどれくらいになるかわかりませんが、この黄昏奏をよろしくお願い致します

第1話 芸能マネージャーをする理由

ジャーツ…

女子トイレに響き渡る水の音。手を洗い、持っていたハンカチで手をふく私。そして、身だしなみを整えながら、鏡に映る自分――

いのまたかな
猪俣神奈を見つめていた。

あれから、1年か…

ため息をつきながら、物思いにふける。ただし、私が見つめていたのは、鏡に映る自分の顔ではなく、身体…肉体であった。

「…って、そろそろ行かなきゃ…!!」

時計で時刻を確認した私は、そろそろ行くべき場所へ行かなくてはならない事に気が付く。

手にしていた化粧ポーチを握りしめて女子トイレを出た私は、建物の中を走り出す。

「はい、オッケーです!」

プロデューサーによるOKの合図が、スタジオ中に響く。

その声とほぼ同時に、私はスタジオの入口から中に入ってきたのである。

「神奈ちゃん!!」

「文也さん!!」

自分の存在に気が付いた長身の男性が、私の名前を呼ぶ。

「んもう…ギリギリセーフって所かしらね?次からは気を付けて!」

「はい…すみません」

私はこの場所に来るのが予定より微妙に遅かったため、このおねえ言葉を話す鉤谷文也かきたにふみやマネージャーに注意をされる。

「お疲れ!」

明るくて元気な声をした男性が、私達の近くにくる。

「あ…あたる能君!移動があるから、早めに着替えてね!!」

「了解！」

オレンジ系の茶髪をした青年・みねふるいあたる峯古井能は、私達とすれ違うような形でスタジオから出ていく。

「文ちゃん。この後の予定は…？」

「貴一ちゃん！そうね、次は夜次郎ちゃんと2人で音楽雑誌の取材が2件。それから、貴方だけでメンズ雑誌の撮影が2件よ！だから、さつさと着替えてきてちょうだい…！！」

文也さんは、自分と同じくらいの背丈である篠崎貴一しのさきいちをスタジオのドアへと誘う。

「神奈…！」

「あ…」

手帳を開いて予定を確認する私の後ろから、ハスキーな声が響く。

振り向くと、そこには黒と紫の入り混じった髪と赤い瞳を持った青年——やおりゅうかいる八尾龍戒流がいた。背が高く、サラサラのショート

ヘアが揺れる。

この男性ひとがきっかけで、全てが始まったんだ——

私は、この青年を見つめながらそんな事を考えていた。

「…聞いているのか？」

「あ…！」

私は彼の声で我に返る。

「次は、CM撮影の打ち合わせだろ？早く行った方がいいんだよね！？」

ボンヤリしていた私を急かすように、彼は私にこの後の事を述べる。

「そうね…さつさと、行くわよ！！」

「了解」

この後も予定がある事を思いだした私は、彼を先導してスタジオを離れる。

現在20歳である私の職業は、芸能人マネージャー。年齢も年齢なだけに、まだ始めてから1年と少ししか経過していない。

そんな私が担当しているタレントは、“A B Y S S”^{アビス}という現在、
大人気のバンドグループ。ヘビーな声でたくさん女性の虜にする
ボーカルの八尾龍戒流やおりゆうかいりゅうを始めとし、ギターの高麗彰こうらいあきひろや先ほどのベー
シスト・峯古井能みねふるいあたる。ドラムの篠崎貢一しのざききいちをリーダーとし、キーボード
古尺夜次郎こさきよじろうと共に活動しているグループだ。

「打ち合わせの後の予定は？」

「今日はこれだけね。ここ数日、嵐のように忙しかったからゆつくり休めるわよ！」

「…ゆつくりねえ…」

車での移動中、この後の予定を確認する私と戒流と能の3人。

「あー！だつたさらあ、久々にこの3人でご飯食べに行かない！？」

「いいかもね！…あ、でも、能君は明日は朝早いんじゃないかなったっけ？」

「平気平気！！」

「でも…」

いくらこの後の予定が多くないとはいえ、翌日に備えないと疲れてしまふ。

そういったアーティストの体調を危惧するのもマネージャーの仕事だと、文ちゃんから教えられている。

どうすべきかと私が迷っていると、右隣に座っている戒流が口を開く。

「なら、社長の所へ行かないか？」

「……！」

その台詞を聞いた途端、私や能君の表情が一変する。

そう…私たちにとってその台詞は、ある事への合言葉であり、能君の明るい雰囲気を一発で変えてしまうような深刻な事を指していた。
「…親父さんの件で、また何か新しい情報があるかもしれないしな

…」

ボソツと低い声を出しながら、戒流が私の耳元で囁く。

…A B Y S Sファンが魅了わけされる理由が、大いに理解できるな…

この時、ハスキーボイスで囁かれた私は、頬を少し赤らめる。戒流達のマネージャーを始めて1年が経過しているが、未だに耳元で囁かれるとドキドキしてしまう。

ただし、私がドキドキするのは、彼の声だけが理由ではない。

「あ…神奈ちゃん！胸元の所を気をつけた方がいいよ！谷間もそうだけど…君の場合、”アレ”も見えちゃうから…！」

「あ…！」

すると、左隣に座っている能君が、インナーが少し下がっているのを指摘してくれた。

「ありがと…」

私は俯きながらお礼を言う。

その後、戒流と能君は、到着までの数分間を眠って過ごす事にした。その間に私は、自分の身だしなみを整えながら、眠っている彼らを見つめていた。

…進展していればいいな…

私は内心でそう思いながら、窓から見える景色を眺めていた。

「…なぜ俺が、缶チューハイのCMなんかに…」

戒流がブツクサと呟く。

あれから数時間後

打ち合わせの終わった私と戒

流は、彼らが所属する事務所・ルステイクワイアへ到着する。

「1・2ヶ月くらいは会っていない…よな？」

「うん…」

事務所の建物に入った私達は、話しながら歩く。

「あ…皆、戻っていたのね！」

エレベーターに乗る時、私達の後ろから能君や夜次郎、それに彰や貴一さんが現れる。

「メンズ雑誌の撮影が思いのほか早く終わったんだ！この後、プライベートな予定もないからどうしようか…」と思った所で、能から連

絡をもらっただ」

「そっか…」

私の視界には、背が高く、蒼と黒の入り混じった髪を持ち、伊達眼鏡をかけた貴一さんが入っていた。

「…ってか、夜次郎！立ち寝はいいから、そろそろ社長室だぞ！」

栗色の髪をした夜次郎が、その場で突っ立って居眠りをしていた。そんな彼の頬を叩いて起こしている金髪碧眼の青年が、彰である。

他の人から見ると…「やっぱり、」普通の男の子達”にしか見えな
いんだろっな、彼らは…

私はABYSSの皆の会話を聞きながら、内心でそんな事を思っていた。

「おっ！お前ら全員揃ってのご登場とは、久しいなあ…！」

ノックをして入った先には、事務所の社長であるモテット・久光社長が待っていた。

「おかげさんで、人間共に引っ張りだこ扱いだぜ！社長…！」

「ふ…。だが、あまり大きな声で彼らを”そんな呼び方”で言うな。ここにも一人、いるわけだし…」

皮肉たっぷりである戒流の台詞を聞き流しながら、社長の視線は私の方を向いていた。

「久しぶりに会ったからゆっくりしたい所だが…。君がいるという事は、”例の件”だね？神奈くん」

「はい、社長…」

穏やかな口調ではあるが、社長の言葉一つ一つには、抗えない圧力みたいなものを私は感じていた。

すると、彰が社長室の窓にある遮光カーテンを閉める。すると、部屋の中が暗くなり、代わりに蝋燭の火がとる。

「本題へ入る前に…だ。わたしに、彼らとの”契約の証”を見せてほしい」

「社長…？」

「能：今は、モテツト”様”だよ」

私と社長との会話のすぐ後ろで、能君や夜次郎がモゴモゴと話していた。

社長の求めに応じた私は、着ていたジャケットやスカートを脱ぎ始める。そして、ABYSSの全員や社長が見守る中、私は下着1枚の格好となる。本来、男性の前でそんな姿になるのは恥ずかしいと思うのが、女性として当たり前の感覚。ただし、今の私にはそれがない。私は1年前の”あの日”から、そういった人としての感覚を失いつつあるのだから――

「俺ら5人と契約を交わせる程の魂…。お前が何者かはわからないが、こうやって見ていると不思議な感じがするな…」

私の姿をまじまじと見つめながら、彰がつぶやく。

部屋の中央に立つ私の身体には、”契約書”と呼ばれる刻印が5つ存在している。

「確かに、これまでに5人の悪魔と契約を交わした人間などいないだが…それだけ、君の魂には価値があるという事だ。猪俣神奈…」
腕を組んで考え事をしながら、久光社長は語る。

そう、この社長や戒流達5人の正体は、地獄から来た悪魔なのである。1年前…火事で焼け死ぬはずだった私は彼らに助けられた事で、一命を取り留める。また、私が果たしたい目的――「失踪した父親を探す」事を手伝ってもらったために、彼らとの契約を交わした。そういった経緯があり、私はマネージャーの仕事の傍ら、彼らとともに父の行方を捜している。

「”契約書”は、悪魔と人間が契りを交わした証…。お前が目的を果たした後は、どうなるのか…わかっているよな？」

紅い瞳をぎらつかせた戒流が、私の目の前にやってくる。

「…この魂と血肉を、あなた達5人に捧げる…でしょ？」

「ああ…」

私は、胸元に刻まれた刻印を抑えながら、彼の質問に答えた。

”契約書”と呼ばれる刻印は、身体のいろんな所に刻まれている。

戒流の刻印が胸元。彰が首の後ろで能君が右腕。夜次郎が左腕で、貴一さんのが左足の裏にある。

悪魔^{かれら}がなぜ、私に力を貸してくれるのか…詳しい事はわからない。でも、私は自分の目的を果たすためならば、人でない存在であろうと、使えるものは使うのだから…！

私の中には、そんな静かな炎の心が存在しているのであった。

「…さて！もう服を着て大丈夫だぞ、神奈くん」

「あ…はい！」

私の刻印を見つめていた社長が、いつもの状態に戻り、私も服を着始める。

その後、私達は仕事に関する事を一通り報告した後、”本題”へと突入する。

「さて、神奈くんの父親…猪俣博士の件だが、お前達の情報網で何かわかったことはあるか？」

社長は自分の向かいに座るABYSSの面々を見渡しながら、そう口にする。

しかし、彼らは苦そうな表情をしながら黙り込む。

「…一つ、妙な噂が」

「ほう…。それは、どんな噂なんだ？戒流…」

沈黙を最初に破ったのは、戒流だった。

そして、私達の視線が彼へと集中する。

「今、人間達の間で新たなドラッグ^やが流行^はっているらしい。…もしかしたら、博士が発明した、”アレ”かもしれない…」

「”アレ”…？」

少しだけ遠まわしな言い方に、私は首をかしげる。

「…”LaNDe”^{ランデ}か…」

「先日、夜次郎が話したとか言ってたけど…聞いていなかった？神奈ちゃん」

「いえ…。今、初めて聞きました」

社長がボソリと呟く中、貴一さんが私に話しかける。

「…それを服用した人間は、己の前世にまつわる”何か”が目覚める。それが、記憶であったり、肉体的変化であったりは…十人十色だな」

「前世の…？」

彰の言葉に私は首をかしげたものの、驚きはしなかった。

…悪魔である彼らと行動を共にしているせいか、普通ならありえない事に対しても、あまり驚かなくなったな…

私は、内心ではそんな事を考えていた。

「何にせよ、可能性は見過ごさず、しっかりと見極める事が大事だからな。だが…いつも言っている通り、わたしはこれでも社長だからな。一緒に行くことはできないが…」

社長が話している途中で、外からノックする音が聞こえる。

「社長、失礼致します」

一言述べた後に入ってきたのは、マネージャーの文也さんだった。

「鉤谷！^{フツバ}ABYSSの予定の合間で、外出できる日はあるか？」

「あら、モテツト様ってばいきなりなのね！うーんと…」

中に入ってきていきなり次の予定を聞かれた文也さんは、一瞬の内に手帳を開く。

「そうねえ…戒流と彰の2人だったら、明後日の夕方以降は空けられるわ！」

手帳を確認しながら答える文也さん。

言うまでもなく、彼も悪魔の一人。そして、久光社長の部下にあたる。

すると、社長は社長椅子から立ち上がって、私達を見渡す。

「では、戒流と彰！！お前ら2人は仕事が終わった後、その噂の検証を神奈くんとしてくれ」

「…了解」

「わかりました」

社長の命により、返事をする戒流と彰。

そんな彼らの表情には強い意志と共に、悪魔特有の危うい雰囲気をもし出している。

父の手がかり…ちゃんと見つかるといいな…

そんな事を考えながら、私は彼ら2人と共に社長室を後にするのであった――

第1話 芸能マナージャーをする理由（後書き）

いかがでしたでしょうか。

今回は現代物ファンタジーのため、お仕事している所も書かなくては…といういろと試行錯誤しながら書きました。

しょっぱなから訳分らない方も多いかと思いますが、後々でいろいろと変化していくので、今はご容赦を…

ストーリーの中盤辺りのシナリオが既に出来上がっているのですが、そこへ至るまでがどうなるか…と勝負所なかんじ。

一つ言えるのは、このABYSSの彼らはかなりキャラの濃い男の子達といったところでしょうか？

ちなみに、ABYSSの意味は深海、深淵・しんえん深い地割れ・底知れず深いもの、計り知れないもの、無限なもの（時間など）という言葉です。戒流達5人が悪魔であるため、そういった言葉に結び付けられる単語をバンド名にしようと思いました。また、神奈を含む彼らの名前には、無簧管楽器（木管楽器のようなもの）の字を何文字か載けてます。誰がどの字だったか、ウィキペディアとかを見ればわかります。笑

さて、作者としても展開がどうなるだろうってかんじですが、今後ともよろしくお願いします！

また、ご意見・ご感想があればお願い致します。

第2話 手がかりを求めて（前書き）

この作品では、基本は主人公の神奈視線ですが、時々それ以外の登場人物の視線で物語が続きます。

今回は戒流視線からお楽しみください。

第2話 手がかりを求めて

「私は、何が何でも生きて、やり遂げなければならぬ目的がある。そのためには…どんな手段であろうと、私は利用する！！それが、悪魔に魂を売り渡す事になるうとも…！！」

1年前――燃え盛る炎の中で、その黒き瞳を持つ娘は告げた。

契約の際に猪俣神奈という名前を聞いたが、本当は既に名前とどんな肩書きを持つのかを知っていた。

人間界でバンドをやっている俺・彰・能・夜次郎・貴一は本来、地獄でも多少名の知れた悪魔であつた。しかし、なぜ人間界にわざわざ出向いているのか…その理由は、神奈の父親にあつた。

「猪俣尚文博士…^{いのまたなふみ}。 “契約” をしていない人間を飼っていた男…か」
口からタバコの副流煙を吐きながら、彰が呟く。

俺らの主であり、人間界^{こうち}では事務所の社長に当たるモテット・久光との面会をした翌日、撮影の合間に俺は彰と2人でスタジオの屋上にいた。

「そして、^{ランデ}“Land e” を発明した同胞^{やつ}…」
俺は腕を組みながら、ポツリと呟く。

神奈が探す父・尚文は、俺たちも必死になつて探している悪魔の一人。あいつには、父親と血がつながっていない事や、博士が悪魔である事は出逢つた頃に一通り話した。最も、血がつながっていない事は既に知っていたようだが、人間じゃない事を知ると、神奈は驚いていた。

「しかし…博士はなぜ、神奈と“契約”を交わさないで行動を共にしていたんだろうか？」

「おそらく、人間界での肩書を作るため…とか、そんなものなんじゃないか？」

2人はたばこを吸いながら、会話を続ける。

…本来、“契約”という形でしか、俺たちは人間と行動を共にする事はない。…博士の奴、何を考えているのやら…

俺は内心でそんな事を考えていた。

「…何にせよだ。どんな事があるうとも、契約が終わるまでは神奈を守る事。そして、あの”1年前の出来事”が“仕組まれた火事”である事を本人に悟られないようにしなくてはな…。って、聞いているのか？戒流？」

腕を組んで考え事をしていた俺を見た彰は、下から顔をのぞかせてきた。

「わかつてる。…ヘマはしないようにしなくてはな…」

覗き込まれて驚きはしたものの、顔に出したくなかった俺は、必死でこらえていた。

すると、少し離れた場所から神奈が走ってくるのが見える。

「戒流！彰！！メイクさんが化粧直したいから、早く戻ってこいですって！！」

春物のジャケットを羽織って長い黒髪をハーフアップした神奈は、大きな声で張り上げながら屋上の入口に立っていた。

「人間のままことも最初は面倒だったが…最近は慣れてきたのかもな…」

今度は、彰がポツリと呟いた。

俺達が神奈と“契約”をする前——「博士をどのよう

にして探すか」という手段として、バンドを組み芸能活動を始めた俺達。歌を歌って金をもらっただけ…と考えていたこの仕事は思いのほか忙しく、人間よりも体力のある俺たちだからこそ、難なくこなせるのがよくわかる。実際、芸能界という業界では、俺達と同じ悪魔が活躍している例が多い。^{ケース}デビューから3年が経過し、同胞である鉤谷文也だけでは、スケジュール管理等ができなくなっていた。そのため、契約を交わした神奈に「自分達のマネージャーになって、補佐する事」を、願いを叶えるための条件としたのである。

「ああ。悪いな…」

冷やかな笑みを浮かべながら、俺と彰は神奈の元へと歩き出す。彼女とすれ違った時、その小さな頭を軽く撫でるようにして叩く。その時の神奈はきよとんとしていた。

「…か弱き魂と、生への強き執念か…。アンバランスな娘だな」

「？何か言ったか？」

階段を少しずつ降りていると、自分の呟きに彰が反応する。

「…なんでもねえよ」

不思議そうな表情をする彰を横目で見た俺は、スタジオへと歩いて戻っていく。

「ここが、噂の…場所？」

「ああ。そうだが…？」

翌日の夜、俺・彰・神奈の3人は車でとある場所に到達していた。「近代的と言えばそうかもしれないけど…渡す場所としては、珍しいな…」

神奈が納得いかないような表情で呟いていた。

俺達が車の車窓から見えていた建物は、どこにでもありそうなインターネットカフェ。俺が掴んだ情報によると、このネットカフェが物の受け渡し場所らしい。

「…行こうぜ」

「あ…ちよつと！会員証とか、持っているの？？」

「問題ない。僕が持っているから…」

サングラスをかけた彰がそう言った直後に、車から外へ出る。

いちいち面倒くさいが…

俺は伊達メガネと帽子をかぶり、車から外に出る。どうやら、素顔のままで街を歩いたらファンが群がって大パニックになるための軽い変装。最も、神奈が言うには芸能人がネットカフェに入るのはいちいち面倒くさいことなので、妙な噂が立つ事はない。しかし、そのよ

うな配慮をしなくてはいけない事を考えると、人間は正直面倒くさいとも俺は考えていた。

彰が持つインターネットカフェの会員証を、受付近くにある機械に入れる。

「戒流。とりあえず3人だから、リクライニングとフラットシートでないと入れないけど…どこにする？」

「えっと…」

俺は機械に映る座席図を見つめる。

俺が手に入れた情報ソースだと、確か…

考え事をしながら、希望する席の番号をタッチする。その後、入場手続きを終えた俺達は、自分が決めた位置にあるリクライニングとフラットシートのある席へと移動する。

「ねえ…。どうして、この位置にある席にしたの？」

1→2人入れるフラットシートの席にやってきた俺と神奈。

その時、彼女が俺に対してそう尋ねてきた。

「…静かにしている」

辺りが静かなだけあって、神奈の声が物凄く大きく感じた俺は、すぐさま契約者である神奈の口を塞ぐ。

それとほぼ同時に俺は、彼女の胸元を自身の手で押させる

「…!?!」

口を塞がれた神奈が、何かを口にしようとしていた。

しかし、俺にとってそれが何を言っているのか手に取るようにわかる。

「…今、お前にしか聞こえねえ声で話すから…。よく聞けよ？」

と、俺はその台詞を神奈にしか聞こえないような声で囁いた。

頬を赤らめる彼女に構う事なく、俺は話を始めようとする。ちなみに、自身が契約主に刻んだ刻印を抑えて話すと、その者にしか聴こえない声で話せる。これはいわば、「人と悪魔が繋がっている」ちから事を意味し、隠し事や内緒話をするのにはもってこいの能力である。

「…このPCからアクセスできる特殊なサイト…。そこへ行けば、“これ”を開けるための暗証番号を入手できる」

俺は自分達の斜め上にある、貴重品を入れるための鍵付物入れをチラツと見る。最近のネットカフェに多いという、ダイヤル式の鍵がついた物入れ。それを見つめながら神奈が口を開く。

「実際にそのサイトは、どうやっていくの？」

「…聞いた話だと、このインターネットで最初から開かれているページのURLがあるだろう？ワールドワイドウェブこのwww以降のアルファベットを逆から入力して…」

俺は耳元で囁きながら、神奈にキーボードを動かすようにと促す。すると、神奈は手慣れたような手つきでキーボードを操作する。

「そして、こことそっちとそこに“L”・“a”・“N”・“D”・

“e”の字を散りばめて…」

俺は、URLの入力する欄を指さしながら、神奈に指示を出している。両手が塞がった状態になった俺は、ふと大事な事を思い出す。

…とはいえ、今回はあくまで“噂の検証”——あまり
深追いすると、せつかくの手がかりもなくなってしまう。…どうするべきか…

俺はパソコンの画面を見つめながら考え事をしていると…

「…あ！」

「パスワード…？」

エンターを押した後…PCには、シンプルかつ独特なデザインのページが映し出される。

そこには更に、パスワードを入力するコマンドがあった。自分が掴んだ情報通り、物入れの鍵を開けるために必要な暗証番号を手に入るまで、もう少しの所まで来ている。しかし、ここでまたパスワードのような物が必要となる事は、戒流にとって全くの予想外であった。

「どうしよう…」

不安そうな表情を見せる神奈。

俺も予想外の出来事に、どう対応すべきかを考える。

「二人とも…」

2人して考え事をしていると、少し離れた個室にいた彰が中に入ってくる。

「彰…どうした…!？」

「…気が付いたか」

彰がなぜこちらに来たのかを考えようとした瞬間、俺は異様な気配を感じ取る。

その気配は、人間ではあるがどこか禍々しい…おかしい気配をまとっている。

「っ…!!」

この時、彰に突然首の後ろを触られた神奈は、口に出してしまいそんな声を手で塞ぐ事で声に出さないようにした。

「偶然か否か…どうやら、“購入者”が来た…って所だな」

彰は神奈の首の後ろにある刻印に触れながら、低い声で呟く。

その後、俺達が入っている個室の隣にあるフラットシートのドアが開く。その後、中に入ったと思われる人間が、キーボードで入力する音を立てる。俺達3人は、隣から聴こえてくるその音に対し、耳を澄まして聞いていた。また、俺と彰に関しては気配も消して…である。それは、用心をするに越したことはないからである。

そして、黙り続けて数分後

——ダイヤル式の物

入れが開く音がした後、隣に入っていた人間は、入口の方へと歩き出していく。そして、その足音が聞こえなくなるのを確認した俺達は、その場のため息をつく。

「あの変な気配も…消えたな」

そう呟いた彰は、神奈の首に当てていた手を離す。

すると、まるで息を止めていたような表情をしていた神奈が、やつと落ち着いたような雰囲気へと変わる。

「…やはり、あの場所が受け取る場所だったのは、間違いなかった

ようだな…」

その後、インターネットカフェを出た俺達は、車に乗って移動を開始していた。

「物入れの中にほんの少しだけ残っていた白い粉…。あれが“L a N D e”？」

「おそろくな…」

神奈と話しながら、俺はビニール袋に入れたL a N D eを眺めていた。

「…とにかく、“それ”の正体については、貴一さんに任せよう。あの男性なら、悪魔系薬学が得意だから…」

彰は俺と神奈を見つめながら、今後の事を話す。

「…結局、父さんの事はわからずじまいか…」

「…何事も、そう簡単に上手くはいかないということだ」
俺は、落ち込む神奈を鼓舞するかのようにして言い放つ。

外敵から守りはする…が、憎しみや憎悪・恐怖などの負の感情をしみつかせた方が、魂は極上の輝きを見せるからな…

悪魔にとって、契約主を貶める事は日常茶飯事の出来事。かすめ取られるのは嫌なので他の悪魔からは守るが、それも見かけだけに過ぎない。

「それにしても…」

俺は、手に入れた白い粉を眺めながらボソツと呟く。

L a N D eらしき粉を見つけた際、ほんの少しだけ味見をした。薬物だけあって、人間が感じるような甘味などは全くなかったが…俺達悪魔がよく口にするような——人間の魂のような味を感じたのである。

こいつは一体、何でできているんだ…？

人間の魂のような味はしたものの、“それ”が材料かどうかの確証はない。そのため、今は自分の胸の内にしまっておく事にした。

「さて、また明日から忙しくなるけど…戒流、どうしたの？」

「ん…？ああ、何でもない…」

気が付くと、手帳を片手に持った神奈が俺の方を向いていた。

それに対して俺は、いつもとんなら変わらない口調で返事をする。

こうして、今回の成果は手がかりとなるであろう白い粉の事以外だと、収穫はなかった。

神奈^{あいづ}にとつては、単なる父親捜しだろうが…俺達にとつては、一族の…運命を左右する重要人物でもあるからな…。何が何でも、探し出さなくては…

俺はスモークガラスの車窓を眺めながら、心の中でそう誓うのであった。

第2話 手がかりを求めて（後書き）

いかがでしたか。

このように視線を変えるのには、まだ主人公が知りえない事をこっそり書くためや、登場人物の具体的な心境をリアルに描き出すためでもあります。

視線の切り替えは1話分ずつとなると思うので、その辺りも注目して読んでいただければと思います。

さて、まだ話が序盤のため訳がわからないかもしれませんが、話が進むごとにいろいろと判明していくでしょう。

ちなみに、インターネットカフェに関しては私も何度か足を運んだことがあるので、どんな場所なのかリアルによくわかるという次第です。笑

座る席を機械で決めたり、ダイヤル式の力ギがついた物入れがネットカフェにあるのは本当です。今回は、私がよく行くネットカフェがモデルとなってますゆえ

ご意見・ご感想をお待ちしています！

第3話 目撃者情報

「え…撮影が長引いているんですか…！？…はい…。はい、わかりました。失礼致します」

そう答えた後、私は電話を切る。

今日は5人揃って行われる、ファンクラブ限定の会報用写真撮影の日である。私かというと…その撮影の合間の時間を使って、駅前にある携帯電話ショップへ向かう途中だった。

夜次郎つてば、防水対応の奴にすればいいのに…

ABYSSの中では夜次郎が唯一、ブログを公開している。ビジュアル系バンドとしてのイメージが強いABYSS^{かれら}だから、普通に携帯で撮った写真等を掲載して記事を書く事がすごい珍しいみたいである。そのため、当然のごとくアクセス数もかなり多い。しかし、ブログの事もあってか、夜次郎は水道やらトイレやらに何度か水没させて、携帯を壊すという事が多い。

「…それなのに、「防水じゃない機種がいい」って言うものだから…全く！」

私は軽いため息をつきながら歩く。

このように、仕事の合間をぬって携帯の修理や新機種購入に私が出向く事が多い。

ただ、撮影が長引いていて幸いだっただな…

そんな事を考えながら、私は街中を颯爽と歩いていく。

「！」

すると、行き交う人々の中で、帽子をかぶった中年男性とすれ違う。反射的に振り向いたが、違うと感じた私は元の向きに戻って歩き出す。

こんな人通りの多い場所で見つかれば、苦労もしないか…

内心でそう思ったのにはもちろん、理由がある。私が探している父は、特徴として帽子を常に着用し、顎に痣を持っている。そのため、

帽子をかぶった中年男性を見かけると、思わず振り向いてしまう習性^{しせい}が身についてしまったようである。しかし、顎^{あご}に痣^{しず}がある人は早々^{はや}いないため、大体はずれの場合が多いのであった。

「元気でやつてるかい？」

「…また貴方ですか」

携帯電話ショッパで順番を待っている途中、40代後半くらいの男性が私に声をかけてくる。

その男性を見た私は、嫌そうな表情で返事をした。

「楠さん…別にネタになるような事はありませんよ」

私は携帯のカタログを読みながら、小声で話す。

この男性

楠 洋介は、週刊誌「アレグロ」の記者。

この「アレグロ」を掲載している出版社とは仕事上のつきあいがあり、記事となる情報を提供したりする事もあるが…実際はかなりあくどい人たちの集まりらしい。しかも、この楠さんはかなりしつこいタイプで、事あるごとに声をかけてくるから、私としてはたまったものではない。

しかも…私の事を気に入ったのか、チーフマネージャーの文也さんよりも、新人の私につつかかってくる事が多いし…

私は疑惑の瞳^めを向けながら、そんな事を考えていた。

「…ありや、そんな表情^{かお}しちゃ美人が台無しだよお？」

「今日は何の用ですか…？」

ひょうひょうとした口調で話す彼に対して、苛立ちを覚える事も日常茶飯事である。

年齢もおそらく自分の倍以上は差があるわけだから、余計に甘く見られているのかもしれない。

「ん…ABYSS^{あいつら}の話も聞きたいけど、今日は別件なんだあー！」

そう話しながら、楠さんは手帳とペンを手にする。

そして、手帳で口元を隠しながら、私の耳元でこっそりと呟く。

「…今日は、ここ最近で出回りのすごい“あれ”の事聞きまわって

いるんだけど…何か知らない？」

「！！！」

その台詞を聞いた途端、私の表情が強張る。

この時私は、先日戒流と彰で見つけた白い粉の事が脳裏に蘇っていた。

すると、その展開を待っていたのか…彼はさらに小さな声で話を続ける。

「神奈ちゃん、何か知らない？配布場所では、変なおっさんの目撃証言がある以外、あまりよくわからないんだけど…」

「目撃…！！？」

この時、私は驚きの余り身体が硬直していた。

もしかして…！！？

私は今の話で何か思い当たったのか、心臓が強く脈打ち始める。その横で、私の次なる発言を待つ楠さん。

「番号札、36番の方！窓口へどうぞ」

すると、ショップの店員さんからのアナウンスが入る。

36番の番号札を持った私は、黙ってその場を立ち上がる。

「…じゃあ、神奈ちゃん。俺たちは外で待っているから、終わったら来てね！」

笑顔でそう言いながら、楠さんは携帯ショップから姿を消した。

「神奈…どうかした？」

「あ…。うつん、何でもない」

「そう…？」

あれから数時間後、私は能君^{あたゝ}と一緒に、彼がゲスト参加するラジオの放送局へ車で向かっていた。

考え事をしていたからか、心配そうな表情^{かお}で彼は私に声をかけたのである。

今日は能君も含め、メンバーが皆忙しい日だしね…。動くなら、

私一人で行くべきかも…

私はそんな事を考えながら、昼間に楠さんとした話を思い出す。

「成程…“^{ランデ}LaNDe”かあ…。変わった名前だけど、服用者はどんな効果があるの？」

「…わからない。わかっているのは、配布場所として首都圏内にあるインターネットカフェが使われるくらい…ですかね」

「なあるほどあー…」

私の話を聞くなり、楠さんは手帳に会話の内容を記録していく。

…最も、普通の人間に“前世の何かを思い出す効果がある”なんて言っても、信じてもらえないでしょうしね…

私は、自分が知っているLaNDeの事を話す。しかし、薬の効果については話さなかった。それは言っても信じてもらえないというものもあるが、何より貴一さんによる成分や効果の分析がまだ終わっていないため、確証のない事は口にできない。少し強張った後で話し終えた後、私は真っ直ぐな瞳で記者を見つめる。

「…約束です、楠さん。そちらも、先ほどの話の続きを…」

私は急かすような表情で、この中年記者を睨む。

しかし、そんな私などに怖気づく事なく、彼は閉じていた口を開く。

「じゃあ、今度は俺たちの番。さっきの続きなんだけど…」

すると、楠さんは自分が持つ手帳の別のページを開きながら話を続ける。

「配布場所には高い確率で、50代くらいのおっさんが出沒するんだよ。そいつの特徴は確か…目が細めで眼鏡をかけていて…顎に痣のある奴だったな…」

「顎に痣…」

私はその夜、能君が出演するラジオの生放送が始まった頃、仕事の合間に…という事で、外出の許可がでる。

それを利用して、私は楠さんが言っていたとあるインターネットカ

フエにたどり着く。偶然だが、ラジオ局からその場所は近く、歩いて5分くらいで見つけることができた。

そんな所に痣がある男性なんて、父以外は考えられない……！もしかしたら、目撃する事ができるかも……？

私はそんな想いを胸に抱きながら、そのお店に入ろうとする。すると……

「きゃっ！？」

すると、ネットカフェがある建物と隣の建物の間から腕が伸びてきたのか、上着の裾ごと引きずり込まれる。

何……！！？

突然の出来事に驚いた私は、手が離れた途端、身構えた体勢で自分をひっぱった人物の方を向く。そこには、20代くらいの金髪な男性が立っていた。

「なあ、その姉ちゃん……」

「……！！？」

その金髪の男は、ゆらゆらと揺れるような歩き方をしながら、こっちに近づいてくる。

何だか、呂律が回っていない……。変質者……っていう割には、変なかんじが……

私は薄暗い路地裏で、その変質者のような若者の様子を観察していた。手を出して来たら逃げようと考えていた私は、相手がどう出るかを考え始める。しかし――

「血を……」

「……？」

「血をくれねえかな……？なんか、喉がひどく乾いているんだよね……」
「なっ……！！！」

相手の表情を見た途端、私は全身に鳥肌が立つ。

なんと、男の瞳が充血しているかのように真っ赤で、燃えるような瞳で私を睨んでいた。

何なの、こいつ……！！！！？

相手は戒流達みたいな悪魔ではないのに、肉体が物凄い拒否反応をしている。本能では「逃げる」と声を上げているのに…私の身体は固まって動けなかった。

「いつ…!!」

その直後、右腕を掴まれた私は、そのまま腕を壁に押さえつけられてしまう。

「何…を…!!?」

男は私が着ているYシャツのボタンを無理やり引きちぎる。

そして、がら空きになった首筋から胸の辺りに、ゆっくりと自分の顔を近づけていく。

全く抵抗のできない私は、必死に声を上げて助けを呼ぼうとするが…ひどい緊張感のせいで声が出ない。

とびぬけて長い犬歯…。でも、そんな事あるはず…!!!

顔を近づけられた時、男の口から犬歯が見え隠れする。それを見た私は、この男が何者なのかに薄々勘付いていくが、どうしても“それ”が信じられないでいた。

「あつ…!!!?」

首筋に、何かドロツとした感触を感じた瞬間、私は身体を震わせる。金髪の男はなんと、私の首筋を自身の舌で舐めたのである。皮膚に触れる舌のザラザラした感覚と、ドロツとした唾液の気持ち悪い感覚が首筋に広がる。その行為はまるで、好物を食べるのが待ちきれない獣のようであった。

やっぱりこいつ…私の血を吸うつもりなんだ…!でも、吸血鬼だとすると、なんだってこんな所に…!!?

恐怖の余りに身体は固まっていたが、頭の中はそんな考えが浮かんでいた。

ギラギラと真つ赤な瞳は私の首筋を見つめながら、大きく口を開ける。そこには、吸血鬼だとよくわかる犬歯がしっかりと姿を見せていた。

「…えらい楽しそうじゃねえか、神奈」

「戒流…。そんな意地悪な事を言っでは、またいじけてしまうぞ？」
金髪の男の手によって血を吸われそうになった神奈。

男の牙が首筋に軽くあたってたのとほぼ同時に、聞きなれた声が聞こえたのである。そして、その直後…風の音と共に、空から戒流と貴一さんが現れたのであった――

第3話 目撃者情報（後書き）

いかがでしたでしょうか。

まだ序盤なので謎な事も多いですが、少しずつ構成の方もくみあがってきている次第です。

さて、昨今ではブログを書いている芸能人も多いため、彼らA B Y S Sでも誰か書いてればネット好きにもファンが増えるかな？と思つて、夜次郎が書いている設定にしました。

ちなみに、携帯の画像を投稿する芸能人だと、俳優の佐藤健クンとか…その辺りを意識して書いたかんじです！

あと、今回初登場だった記者・楠 洋介のモデルはドラマ「ギルティー悪魔と契約した女」で唐沢さんがやっていたジャーナリスト。ただし、身なりもそっちモデルにしたら、本当の不審者っぽくなってしまうので、その辺りは設定しませんでした。笑

悪魔が物語に出てくるなら、吸血鬼みたに人外の物が出て当然？なかんじかもしれませんが、ただの吸血鬼ではないです。

また、L a N D eの効力も実証されてませんし…

まだまだいろんな事が続きます。

今後よろしくお願い致します

ご意見・ご感想があればよろしくお願い致します！

第4話 現実性を帯び始める”仮説”（前書き）

今回はABYSSでドラムを務める篠崎貴一の視点で描いています。

第4話 現実性を帯び始める”仮説”

タン…

地面に降り立つ音が静かに響く。

“主”の危機を察した俺と戒流は、空から舞い降りてその場にたどり着く。

これは…

自分と戒流の瞳に映った光景——それは今にも神奈の喉笛を噛み切りそうな雰囲気を持った男が、彼女の血を食らおうとする直前のものであった。

「戒流…貴一さん」

恐怖の余りにかすれた声を懸命に使い、自分達の名前を呼ぶ神奈

「悪魔…だと…!？」

豆鉄砲を食らったような表情をしながら、こちらを睨む金髪の男。

俺と戒流は、ゆっくりと歩きながら彼らに近づいていく。

「神奈は俺達の獲物だ。…それを横取りしようたあ、いい度胸しているなあ…」

「本当に。俺らを怒らせると、何をしでかすかわかったもんじゃないね」

俺は一見穏やかそうな口調で話しながら、その瞳を真つ赤に変える。悪魔族の中では一般常識だが、相手を威嚇する際や怒っている時に悪魔は紅い瞳をギラつかせるという特徴を持つ。

「グオオオオオオオツ!!!!!!」

鼓膜が割れそうになるくらいの雄叫びを上げた金髪の男は、そのまま近くまで来ていた戒流に襲い掛かる。

「戒流!!!!!!」

「わかってる…!!」

俺は戒流に「殺すなよ」という意味もこめて、彼の名前を呼ぶ。

当然、それを理解していた彼は、そのまま吸血鬼“もどき”との攻防を始める。

「大丈夫かい？神奈ちゃん…」

「あ…はい…」

敵のお守りを戒流に任せ、俺は地面に座り込んでいる神奈の元へ行く。

平静を装っているように見えたが…自分の右腕を彼女の腰に回した時、微かに震えている事に気が付く。

「貴一さん…あれって、もしや…？」

「ああ…おそらく、奴は“LaNDe”の中毒者だな」

「…父さん…」

神奈は戒流と攻防している金髪の男を見上げながら、ポツリと呟く。

…外見的には、本物の吸血鬼そのものだが…。魂^{なか}はただの人間…。

しかし、薬一つでここまで変貌させてしまう“LaNDe”の原材料とは一体…？

俺は金髪の男を目で追いながら、一人考え事をしていた。

「…！」

その時、俺の身体が何かに反応する。

気が付くと、神奈の魂から溢れる恐怖や困惑といった負の“気”が発せられている。無論、俺ら悪魔にしかわからない“気”だが、神奈が発するものからは、いつも特殊な「何か」を感じ、身体がそれに反応していた。

…どうやら、あの男に襲われた恐怖と、あの実態を引き起こしたのが自分の父である事…。そんな事で頭がいっぱいだからかもしれないな…。

そう考える一方で…俺ら悪魔が持つ本能が少しずつ目覚めてくる。

『“負”ニオオワレタ人間ノ魂…。極上ノエサ…。悪魔^{なかま}ガ敵ト戦ッテイル今ナラバ…』

己の本能が、自分にそう語りかけてくる。

「神奈ちゃん…」

「…はい…？」

自分の近くにいる娘に声をかける貴一。

その片方の腕は、いつでも魂を取り出せる状態になっていた。幸い、自分達に助けられた事から、彼女から警戒心や殺気は感じられない。「今なら、良い馳走になる」という考えが俺の頭の中に広がってたその時だった。

『貴一よ…。これは、わたしの憶測に過ぎないのだが…』

「…！！！！」

突然、自分の脳裏に過去に話していた出来事が思い浮かぶ。

それは、神奈と契約を交わした後にモテット様とした話のごく一部であった。

「…っ…！！」

構えていた片方の腕を元に戻した俺は、彼女を抱き上げて立ち上がる。

「き…貴一さん…！？」

「…そろそろ、能^{あたる}が出ているラジオの生放送が終わる頃だろう？マネージャーである君がいなくては、周りも不審がる」

「あ…そうか」

俺は彼女を抱きかかえたまま空に飛びあがり、ビルの屋上に立つ。

「で…でも、戒流は…」

「あいつなら、大丈夫。君を食らおうとしたあの男は見た目があんなでも、中身はただの人間…。戒流にとっては生かして捕まえるなんて、朝飯前だから心配するな」

「はい…」

俺はビルの屋上をヒョイヒョイと飛び越えながら、能がいるラジオ局の屋上に到着する。

そして、窓から彼女を入らせた俺は、そのままビルから去ろうとするが、その前にふと大事な事を思い出す。

「何を思い立ってあのネットカフェに行ったのかは知らないけど…。後でゆっくり説明してね…？」

「はい…！では、後ほど…！」

俺に向かつてそう述べた彼女は、大急ぎで局内の廊下を走って行った。

…今はとにかく、あの格好から着替えなくてはいけないしね…

俺は敵にボタンを引きちぎられ、乱れた服装をした彼女を見送りながら思った。

「しかし、この俺が本能に負けそうになるとは…」

俺はボソツと独り言を呟く。

俺達“ABYSS”の5人では、悪魔としての年齢は俺が一番上。

戒流達より長く生きている分、己をコントロールする力を大きいはずである。しかし、そんな自分を崩そうとするくらいの魅力を猪俣神奈は持っている――この事実に対して、貴一はますます彼女が何者なのかが気になるのであった。

「ん…？」

窓によじ登った状態だった俺は、その後は再びラジオ局の屋上に上った。

その時、何気なく下を見た際に何かおかしな人影を見かける。その人影は、全身黒ずくめの服を身にまとい、黒い帽子をかぶっていたが…その帽子から、微かにだが蒼い髪の毛が見え隠れする。その髪の色は、過去に2・3度だけ会ったことのある猪俣博士の髪と全く同じ色をしていた。

「博士…！！？」

急に嫌な予感がした俺は、急いでビルの屋上から地面に降り立ち、走り出す。

ど…こだ…！！？

俺は、彼が見えた路地裏を颯爽と走り抜ける。しかし、気配を消して移動しているのか、同胞ならば感じられる“気”が全く読み取れない。

「…逃がしたか」

俺は少し息切れをしながら、ポツリと呟く。

数分間走り続けた後、大通り前にたどり着いた俺は、その場で立ち止まる。

…いくら変装していても、わかる奴にはわかる…。まさか、芸能人である事が、足枷になる日が来るとはな…

俺はフーツと長いため息をつく。

人間の好みなど到底理解できないが、3年で多くの人間たちが「ファン」として集まるようになり、顔が広く知られているA B Y S S。おれたち先ほどの路地裏ならともかく、このような大通りを歩いていたら、記者やファンに見つかってしまう。そのため、これ以上は博士を追えない状況に自然となってしまった。

「貴一ちゃん！」

「文ちゃん…」

振り返ると、そこにはA B Y S Sのチーフマネージャーである鑑谷文也が立っていた。

「戒流からの伝言なんだけど、例の人間の捕縛が完了したそうよ」

「…了解。ちゃんと、俺の“別宅”に押し込んである？」

「勿論！あの子がしくじるはずもないしね…！」

「そうか…」

博士は取り逃がしてしまっただけ…とにかく、今は見つけたばかりの貴重な手がかりの事だけを考えるようにした。

「それはそうと、貴一ちゃん…。貴方、明日も仕事控えているんだから、少しは仮眠を取りなさい！…“L a N D e”あれの解明を夜通ししていたでしょう…？」

「ん…？ああ、そうだな…」

確かに、この所は休まずに動いていたのは確かであるため、文ちゃんが言う事も最もであった。

「兎に角、近くに待たせてる車で移動するわよ！」

「…了解」

マネージャーの求めに応じた俺は、文ちゃんと一緒に車へ乗りこみ、

夜の街を通り抜けていく。

俺はその時気が付いていなかったが…俺達が乗る車の反対車線で走っていた路上バス——そこには、気配を消していた猪俣博士が乗っていた。俺達の車とそのバスがすれ違ったのはほんの一瞬で、“LaNDe”の事で頭がいっぱいだった俺は気が付く暇すらなかったのである。

あれから2日後、俺は移動の車の中で、神奈からの“報告書”を読んでいた。

「俺がラジオ番組に出ている間、そんな事があつたんだねー！」
その隣では、書類と一緒に読んでいた能がいた。

「あの時、神奈が着ていたYシャツの色が違っていたから、何かあつたんだろうとは思ったけど…。ってか、何気にすごい進歩じゃないの？これって！」

「確かに…。だが…」

「だが…？」

俺が口にした言葉の先を聞こうと、自分の顔を覗き込んでいる能。

楠とかいう記者…。報告書を見る限りでは、普通の人間のようなが…。念のため、こいつの事も調べておいた方が良くかもしれないな…

念には念を…用心に越した事のない俺は、そんな事を考えながら報告書を女子席にある文ちゃんのバッグにしまいこんだ。

「それにしても、貴一ちゃん。…今回の一件で、一つの仮説に現実性が増してきたわよね？」

「ああ…そうだな」

「??？どういう事？」

運転をしながら、文ちゃんは俺達に声をかけてくる。

しかし、状況が飲み込めていない能はきよんとしていた。

「…猪俣博士が作ったとされる“LaNDe”…。これの原料が、

人間の魂ではないか…という仮説だよ」

「人間の…！！？」

俺の台詞に、目を丸くして驚く能。

そんな彼などお構いなしに、俺は話を続ける。

「あの“LaNDe”は、生き物の前世にまつわる“何か”を蘇らせるという効力を持つが…。今回のように、記憶に限らず、肉体的変化をもたらす場合…ただの薬では到底起こせない現象だ」

「その点、生き物の魂——とりわけ、自然界の頂点に立つ“最強種”・人間の魂は、その中に含まれる“情報”は他の生き物に比べて、はるかに多いわよね」

「…ああ。だから、それを使えば、前世にまつまる物を蘇らせるなど…博士の腕があればたやすい事…」

「…でも、仮説って事はまだ…」

能の台詞に、腕を組んでいた俺は首を縦に頷く。

「確証はない…という事だ。だから今後、皆で調べるべきは…」

「その“原料”を何処で調達しているか…って事ね！」

「そういう事」

文ちゃんと俺の台詞で、やっと俺達は話がまとまったのである。

その後、前の撮影で疲れた能はその場で眠りだし、文ちゃんは再び運転に集中する事となる。俺も、暇つぶしに携帯電話で夜次郎が書いているブログの記事を読んでいた。

家でゲームとは…。相変わらず、好きだなあ…

俺はクスツと笑いながら、彼のブログを読んでいたのである。

しかし、俺は彼がなぜ部屋に閉じこもってゲームをしているのかの理由を知っていたから、このブログの記事を読んでも特に何か不審に思う事はなかった。

一度、「あれ」を神奈で試してみるという手も…

携帯をいじりながら、ふと何かを思いつく。しかし、すぐに我に返った俺は“それ”はしない方がいいという結論に達し、頭を横に振

る。

いや…下手したら、神奈あのこが廃人と化してしまうからな…。そんな危ない綱渡りは御免だし…

携帯をいじるのを止めた俺は、瞳を閉じて自分も仮眠を取ることにした。もちろん、考え事もしながらだが…

こうして、“Land e”等の事で頭いっぱいな俺が乗る車は、都心部を走り抜けていく。

今後、俺らだけでなく神奈にとっても脅威となる存在が現れる事を知らずに――

第4話 現実性を帯び始める”仮説”（後書き）

いかがでしたか。

今回は初めて、貴一視線で描いてみました。

ちなみに、今後の展開によって、やはり神奈以外の登場人物視点で物語が進む事もしばしばあるかと思っています。

連載開始前、彼らの一人称をどうすべきか迷いましたが…

神奈↓「私」

戒流・能・貴一↓「俺」

彰・夜次郎↓「僕」

としたいと思っています。

また、この6人以外の登場人物で話を進めることは、こんがらがってしまったため、そうする事はないです。

さて、全ての発端は父親探しにあったのですが、これからどんどん話が大きくなる予定です。

現代の日本を舞台にした作品はこれが初めてのため、いろいろと試行錯誤を繰り返しながら書いていますので、よろしくお願い致します。

前作の「蒼き牡丹」のように章ごとにまとめようかな〜とも考えていますが、それはまだまだ検討中なかんじ

ご意見・ご感想があれば、よろしくお願い致します！

第5話 奏でる音に誘われて（前書き）

今回は神奈視線です。

第5話 奏でる音に誘われて

昼間の河原に、Saxの音が響き渡る。その河原の近くには、アルトサクスを抱える私だけが存在していた。

この日は久々にとれた、たった一日のお休み。昼夜問わずに働く芸能人マネージャーにとってこのように休みの日は、河川敷で思いっきり音を出そうと楽器を担ぎ出している事が多い。このような事をするのは、仕事によるストレス発散もある。しかし、それだけではない。父親探しに進展が現れない事について感じる苛立ちも上乗せされているからである。

チューナーを使えば、少し高低のあっていない音。人間の声に一番近いとも言われるSAXの音色を、息継ぎやタンギングを駆使して吹き上げる。

みんな
ABYSSの曲をSAXで吹くと、すごい楽しくなってくるなあ…
それから数十分後、そんな事を考えながら私は河川敷にこしかけて
ペットボトルのお水を飲んでた。芸能マネージャーは日々、アーティストの曲を生で耳にしているから、本来なら飽きてしまうのが普通かもしれない。しかし、かれらABYSSの曲は何度聴いても飽きる事がない。それは悪魔だからというのもあるかもしれないが、彼らの声や楽器から発する音は、多くの若者を虜にする「何か」を秘めている。故に、こうやって楽器でメロディーラインだけを吹いても楽しいのである。

「さて！今日は他にも寄りたい所があるし…そろそろ移動しようかな！」

水分補給をした私は身体を伸ばして背伸びをし、その場を去ろうと楽器の片づけを始めた。その時…

「ねえ。その君…！」

「？」

後ろから軽快な雰囲気の声が響いてくる。

何だろうと思った私は、スワブを片手にその声がした方に振り向く。すると、そこには帽子をかぶり、伊達眼鏡のようなおしゃれ眼鏡をかけた青年がいた。その帽子の中からはわずかだがオレンジっぽい茶髪の前髪が見え隠れしている。

「悪いんだけど、携帯電話を一瞬貸してくれない？…僕の携帯、さつき充電が切れちゃったんだよ…」

「…嘘じゃないですね？」

突然携帯を貸してほしいという青年に対し、私はうたぐりの眼差しで答える。

「こんな事に嘘はつかないよ！だって、その証拠に…ほら！」

そう口にしながらか、帽子をかぶった青年は自身の携帯電話を取り出して、こちらに見せつけてくる。

「…わかりました。でも、私の携帯をパクらないでくださいね？」

「もちろん！」

私が渋々貸し出すと、彼は満面の笑みを浮かべながら私の携帯電話を受け取る。

手慣れた手つきで携帯のボタンを操作し始めた青年は、受話部分を耳にあてて電話を始める。

「…あ！オッキー？俺…木戸だけど。うん…？ああ、実は携帯の充電が切れちゃって…。スタッフの携帯借りているんだ…」

電話主に対して、この木戸という青年は話し始める。

木戸…？

その名前を聞いた途端、私はそれが聞き覚えのある名前だと自覚する。

帽子に眼鏡…。この背格好、もしかして変装…？

私の携帯で通話をする彼をまじまじと見つめる神奈。この木戸という青年が通話を終えた頃には、彼が何者だという事を理解していた。

「携帯、ありがとうね」

「もしかして…貴方、モデルの木戸海人？」

きどかいと

「！！」

彼は携帯を返してくれたが、私の台詞を聞いて表情を強張らせる。

「…もしかして、僕のファンか何か？」

「あ…いえ！」

変装に気付かれた事に不服なのか、ものすごく嫌な表情で私を睨みつける木戸。

そっか…。私の事、ファンと勘違いしているかも…？

粘着なファンと勘違いされたくない私は、咄嗟にカバンに入っていた名刺入れを取り出す。

「すみません…。私、猪俣神奈と申します」

「“ルステイクワイア株式会社芸能マネージャー、猪俣神奈”…」
私は取り出した名刺を渡し、彼はそれに書かれた内容を読み上げる。その不快そうな表情は、何かゾツとさせるような…。一種の殺気を感じていた。しかし、名刺の内容を読み、それを着ているジャケットのポケットにしまい込むと、そんな殺気は綺麗になくなっていった。
「なる！業界の人間って事かあ…！あれ…？ルステイクワイアって事は…」

「はい。今現在は、ABYSSを主に担当しています」

「へえ…！」

先ほどの殺気だった雰囲気と一変した態度で、私を見下ろす木戸さん。

彼——木戸海人は、大手芸能事務所「ギルティグラインド」に所属する人気ファッションモデル。スタイルはもちろんの事、子犬みたいな顔と、甘え上手な性格で多くの女性から支持されているらしい。年齢は、公式プロフィールだと21歳。私と大して変わらないこの青年は、モデルという事もあって身長が高く背丈は178cmくらいだと思われる。150cmしかない私にとっては見上げなくてはならない長身さであった。

…でも、いくら相手が業界の人でも、ABYSSかれらの事をあまり話しすぎるのは良くないよね…

そう思った私は、何気ない会話を切り出し始める。

「今日は、オフ...というわけでもないですよね？」

「あー...うん！まあ、夕方までは暇人な訳なんだけど...」

私の問いかけに、少しお茶を濁したような口調で彼は答える。

その後、何気ない会話を数分間交わした私達。そして、彼と別れようとした時、私の肩を不意に木戸さんが掴む。

「ねえ...。ちょっとつきあってくれない...？」

「...はい...？」

満面の笑み——まさに「営業スマイル」をした彼に声をかけられ、私はきょとんとしてしまう。それと同時に嫌な予感がしてきたのである。

「いやー、悪いねえー！！つきあってもらっちゃって！！」

「いえ...」

その後、私は半分強制的な感じで、郊外にあるカラオケボックスに連れてこられた。どうやら彼は、夕方から入る仕事まで時間を持って余しているらしい。そのため、マネージャーが迎えにくるまでの時間つぶしにつきあってほしいとの事だった。正直な所、久々の休日なので一人でのんびりしたいという気持ちがあったわけではない。

...まあ、こうやって他の事務所のタレントと仲良くしておけば、今後仕事で役に立つかもしれないし...

「これも仕事の一種」と考えながら、私は彼の熱唱につきあう事に...ここ、駅から離れたカラオケボックスだからいいけど...。駅前の人気店とかだったら、パニックになっただろうなあ...

私は外をチラリと見つめながら、そんな事を考えていた。

「...でも、ドリンクを持ってきた店員さんは流石に気が付いているのかもね...」

「ん？何か言った...？」

「いえ…」

木戸さんが楽しく歌っている中、私は独り言を呟いていた。というのも、ワンドリンク制のこの場所で注文品を持ってきてくれた時、店員さんが頬を赤らめながら出て行ったのを目撃していたからである。流石に店の中では変装をほぼ解いていたので、気が付かれるのも無理はない。

カラオケに対しては、それ自体は嫌いじゃないし、私も時々カラオケボックスに来ては、SAXを室内で吹いたり…で、利用する頻度は結構高い。ただ、唯一不服だったのは…彼が、やけに近いからである。

「…神奈ちゃん、歌わないの？」

「んー…何を歌おうか、悩んでいます」

室内のソファは、二人で座するには大きくて広々としていたが…なぜか彼は、私と脚が密着するくらい近くに座っている。

最も、彼はファッションに限らずヌードもやったりするから、他人に触れるのは慣れているんだろう。しかし、一般人の私としては、少しドキドキしていた。

肩に手をまわしてくるし…。やっぱり、「女つたらし」という噂は本当なのかも…

私は口をブクリと膨らませながら、そんな事を考えていた。

「ところで、神奈ちゃん」

「…何ですか？」

カラオケを初めてから2時間後

——木戸さんは

私の肩に回していた手を離し、普通に私の顔を見つめながら話しかけてくる。

軽快なリズムを刻むように明るくしゃべる彼。そんな彼が少し遠くを見つめながら、再び口を開く。

「…君、天使と悪魔って存在すると思う…？」

「何を突然…」

私は“悪魔”という言葉にドキツとしながらも、平然を装うふりをして彼の話を聞く。

「彼らは、正と負…相反する2つの属性を持つ生き物同士。一般的に天使が“正義”で悪魔が“悪”なんて言われているけど…君はそれについて、どう思う？」

「どう思うか…ですか？」

「そう」

私の問いかけに、彼は首を縦に頷く。

なぜ、この男性がこんな話を始めたのかわからないけど…

私は夜次郎の“契約書”が刻まれている左腕を掴みながら思う。天使はともかく、“悪魔”という者達が実在し、行動を共にしている神奈にとっては、この話はくだらない話とは言い難い。

「“相容れない存在”…じゃないかと…」

「“相容れない”…？」

「…はい。確かに、一般的なイメージとしては天使の方が良い印象かもしれないです。ただし、その人たちの行動全てが正しいわけではない…。それに…悪魔とて、所構わず悪さをしているわけではないと思うんです。彼らにも彼らなりの考えや想いがある…。それを互いに認め合う事は到底できないし、仮に悪魔の持つ考えが正しかったとしても、天使はそれを認めない…。多分、考え方が根本的に違うから…何度でも争うし、考えが交わらない…。つまり、相容れない存在なんだ…そう思います」

私はゆつくりと彼に対して話す。

それを木戸さんは黙って聞いていた。

「だから、“あれ”が行方不明になっても、未だ見つけることができ…か」

「木戸さん？」

突然、木戸さんが呟いたので、ふと私は聞き返す。

ただし、その呟きが私には聞こえていなかったのである。きょとんとしている私に気が付いた彼は、フツと柔らかな笑顔を見せる。

「!？」

それに対して私は愛想笑いをするが…突然、周囲の空気が変わったような感覚を覚え、愛想笑いもひきつったものになってしまう。

「きゃっ…」

突然、何かがおおいかぶさってきたのに気付いた私は、小さな悲鳴をあげる。

気が付くと、私はソファの上に押し倒され、頭上には木戸さんの顔があった。

「何を…!？」

私を見下ろす彼の表情は、笑顔というより、不気味な笑みに変貌していた。

その表情を見た瞬間、私は背筋が凍ったかのような感覚に陥る。

「君、面白い娘だね…」

そう呟く彼の瞳がひどくギラツいていて、とても怖い。

もしや、この男性…悪魔…!？

急が増した殺気から、私は彼が戒流達と同じ悪魔ではないかと疑い始める。

「何…別に、レイプしたりとかはしないから安心して。ただ、お近づきの印として…」

そう口にしなが、彼は私が着ているシャツワンプのボタンを一つずつ開いていく。

「…っ!！」

木戸さんはボタンを全部ではなく、胸元までしか開かなかった。

そのかわり、ボタンを開いた時に現れる刻印——戒流の

“契約書”にソツと口づけをする。キス自体は軽い物なのに、“契約書”に口づけをされたせいか…心臓が一瞬強く脈打ったのである。

「…それは、単なる“ご挨拶”だよ。君がああ“5人の悪魔”の主だったみたいだし…」

胸元に口づけをした後、彼は身を起こしてそんな事を不意に呟く。肩近くにあった彼の腕が離れ、起き上った私は突然の出来事に動揺

を隠せなかった。

「貴方も…悪魔…？」

「そう」

私は、肩を震わせながら必死で彼の正体を聞き出そうとする。ただし、彼は呆気もなく自分が悪魔である事を認めた。

「…でも、僕は他の悪魔の餌を盗み食いする趣味はないから、安心して！今日、神奈ちゃんに出会えたのも、本当に偶然だし」

「…」

ひょうひょうとした態度で話す彼に対し、私はただ黙っている事しかできなかった。

「…私がなぜ、彼らと契約を結んでいるのか…とか、そういう事は訊かないのね？」

「まあ、僕はあまりそういうのには興味ないからね！…さて」

おちゃらけた表情が一変し、彼は壁際にあるコンセントに差しである携帯電話の充電器に視線を向ける。

「携帯の充電も結構できたし…。そろそろ、マネージャーと落ち合う時間が近づきつつあるから、行くね！」

「はあ…」

木戸さんは数秒だけ考え事をしていたが、その後、何事もなかったかのようにして部屋から立ち去る。

私だけがその場に取り残され、開いたボタンを閉めながら、ボンヤリと考え事をしていたのであった。

「オツキー、おまたせ！」

私がカラオケボックスで呆気に取られていた頃、当の木戸さんは彼のマネージャーであるオツキーこと沖田八郎太と合流し、車で移動していた。

「…また、人間の女と遊んでいたんですか？」

「…バレてたんだね、やっぱり」

ため息交じりで言う沖田に対し、舌を出しながら苦笑いをする木戸。
「マイペースな貴方が、仕事以外でスタッフと一緒にいるなんてありえませんか…」

「…もう！オツキーはいじわるなんだから…。でも、ただ遊んでいたわけではないよ！」

「…？」

突然、ニマニマしながら話し出した木戸さんに対し、沖田は不思議そうな表情をする。

「…偶然だけど、“ABYSS”のマネージャーをやっている女の子に会ったんだ…！」

「その方って、確か…」

「そう。モテット久光…あの“地獄の侯爵”と呼ばれた悪魔に仕える5人…。彼らと契約したという人間の娘…」

「…海人、貴方は何を考えているのですか…？」

得意げに話す木戸さんに対し、深刻な表情を浮かべながらマネージャーは彼を見つめる。

「んーそうだねえ…。“あの人”に話せば、面白い事になるんじゃないかなーとか思ってた！」

「“あの方”に…。成程…」

最初は納得いかないような口調をしていたが、木戸さんが“あの人”という言葉をした途端、納得したような表情に変わっていた。
「さーて！どうなるのかなあー♪」

木戸さんは、窓から見える景色を眺めながら一人、不気味な笑みを浮かべていた。

第5話 奏でる音に誘われて（後書き）

いかがでしたか。

今回は、少し一休みの回となりました！

そして、神奈が河原でSAXを吹いていた事について…。

登場人物紹介でも趣味として書きましたが、これは作者自身が現在、^{アルト}SAXをやっているという事実から取り入れてみた次第です。

今でもですが、普通に演奏している場面を文として書くのはとても不思議な感じがしました。

ただ、これまでの作品では自分が経験したことのある楽器について書いたことなかったので、楽しくもあたりします！

さて…今回初登場となった木戸海人と沖田八郎太ですが、もちろん一発キャラとかではありません。一つ補足しますと、海人はもちろんのこと、八郎太も戒流達のような悪魔です。

彼らが口に使っていた”あの人”とは一体？

そして、父親探しの進展はいかに？

…次回もお楽しみに

ご意見・ご感想があればよろしく願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7286u/>

黄昏を生む器は何を奏でる

2011年10月6日17時51分発行